黴雨の候　宮崎県防衛協会青年部会　宮崎支部会員の皆様には益々ご清福の段、大慶至極に存じ上げます。

また皆様には日頃より当支部運営に際しまして、並々なるご尽力を賜り、衷心より厚くお礼申し上げる次第です。

さて先月は、自衛隊関連行事は何もありませんでしたので、皆様に報告する事は特別ありませんが、小川先生より面白いメルマガが届き、お許しを得て添付しますから何卒ご一読下さい。

激論を交わすと見える中国の本音

シンガポールでの安倍首相演説に**中国は猛反発**しましたが、いまの中国相手には**あれで正解**だったのだと私は思っています。

首相、中国念頭「強い非難」　ルール作り呼びかけ

「【シンガポール＝永井央紀】安倍晋三首相は五月三十日夜、シンガポールでのアジア安全保障会議で講演した。中国による**防空識別圏の設定や南シナ海での衝突**を念頭に『既成事実を積み重ね、**現状の変化**を固定しようとする動きは**強い非難**の対象とならざるを得ない』と批判。中国との紛争の平和的解決を目指すベトナムやフィリピンを『強く支持する』と述べた。（後略）（五月三十一日付、日本経済新聞朝刊）

今回は、ご参考までに**中国人民解放軍の上層部との対話**の中身をご紹介しておきたいと思います。数回にわたる異なる相手との対話のから、**中国側に共通する姿勢と論理**をピックアップしておきます。

とにかく、中国側の言い分は**牽強付会**、つまり自分に都合のよいように論理を展開するものばかりが目立ちます。

たとえば**南シナ海**でのベトナム、フィリピンとの紛争。

中国の将軍たち「遠く離れているからといって、中国が領有権を主張できないとするのはおかしい。アルゼンチンと英国が戦争した**フォークランド諸島だって、英国本土から何千キロ**も離れているではないか。あのフォークランド諸島を英国は**歴史的に実効支配**してきた。南シナ海だって、他の国が航海術などを備えていない時代から、中国は自国の海として支配してきたのだ」

小川「先にやった方が正当性を持つというのであれば、東シナ海に設定した**防空識別圏はなんだ。日本ははるか昔に設定**していた。中国

は昨年十一月二十三日ではないか。それを覆そうとする中国の姿勢を、『力によって支配しようとする姿勢』と言わずに、なんというのか」

中国側「……」。

小川「外交は国際法の秩序を前提にすべきものだ。**尖閣諸島**については、**国際司法裁判所**に行くことで解決を図りたい。日本は百％勝つ。中国も応じるべきだ」

中国側「国際司法裁判所の判事たちが、はたして**日本の言い分を認めるだろうか。**とにかく日本は、**歴史問題**を解決していないのだから、国際的な印象はよいとは言えない」

小川「今の中国に対する世界のイメージよりは、日本の方がましかも知れないよ」

このように、しばし**非難の応酬**が続くのが、**何か事件が起きたあとの私と中国側**の対話のパターンです。

以上のやりとりをしたときは、南シナ海の話に入る前に、前段の話がありました。中国戦闘機の**自衛隊機に対する異常接近事件**をめぐる応酬です。

小川「あんなことをすると、二〇〇一年の**海南島事件**の二の舞だ。**戦争**になるぞ。それに、あの戦闘機は電子妨害でも落とせることを忘れるな」

電子妨害うんぬんは私のブラフですが、かなり**険悪な雰囲気**になりました。

中国側「自衛隊機が飛んでいたのは**中国の防空識別圏内**だ。それにロシアとの合同**演習**は事前に通告してある。自衛隊機はそれを**妨害したからスクランブル**をかけた」

小川「あそこは日中中間線の周辺で、日本の防空識別圏でもある。中国は昨年十一月二十三日に設定したばかりだが、**日本はずっと防空識別圏として管理**してきた空域だ。それに**海空での軍事衝突**ということになれば、**緒戦では日本側が圧勝**するのは、貴官が中国人民解放軍の将軍なら理解できるだろう。軍艦の五～六隻が瞬く間に撃沈され、その映像が世界に流れれば、そして中国に日米との本格的な戦争に踏み切る意志がなければ、**中国の国際的な威信は地に落**ちて、何十年も

回復不能となるのは明らかだ」

中国側「日本の強硬論者は、中国は経済格差に対する国民の不満、ウイグルのテロ、環境問題などを抱えていて分裂寸前だと、それを期待するようなことをいう。そういう問題を抱えているのは事実だが、それでも**日本との戦争**ということになれば**国民は一致団結**して戦うだろう。日本が**歴史問題**を解決していないからだ。日本に勝ち目はあるのか」

小川「中国の国民は、日本との戦争をきっかけに中国共産党の政権を打倒する方向に動くかも知れないし、そうでなくとも分裂は加速するかも知れない。**団結すると言い切れるのかね。それに、米国から見ると日本列島**は中国語で言う『**核心的利益**』だ。同盟国である日本を守るかどうかではなく、『自国の領土』を守るために中国を軍事攻撃することを忘れてはいけない」

そして、上記の国際司法裁判所に行くか行かないかの話まで**応酬が続いたあと**、いつものパターンで「**引っ越しできない関係**」の日中両国が平和と繁栄を実現するために、いま**何をすべきか**の話になっていきます。

ここでは簡単にしか触れませんが、**中国側**は「島（尖閣諸島）の周辺では**日本に配慮して、武装していない公船**しか出していない。南シナ海とは違う。それを理解してほしい。それに南シナ海だって、激しく衝突している一方で、ベトナムとの話し合いは始まっている」と強調し、海上、航空での**衝突防止のメカニズム**の話し合いを、どのように進めるべきか、意見交換することになりました。

私は言いました。「そのためには、あの戦闘機の**異常接近事件**についても、『若いパイロットは血の気が多くて困る』とか『風に吹かれて近づきすぎた』という理由でもよいから、事態をそれ以上に悪化させなくてすむような**中国なりの『誠意』を見せるべきだ**」と、ソ連が一九八七年十二月九日の偵察機ＴＵ１６による南西諸島での領空侵犯事件と航空自衛隊のＦ４ファントムによる警告射撃のあと、機長を降格処分にした例を話しました。

そんなやりとりをしながら、日中首脳会談に向けての環境作りということになり、**首脳会談での非難の応酬**は両国関係を決定的に悪化させるから、何があっても**避けなければ**ならないという事になりました。

諸課題の解決に向けての取り組みをスタートさせ、それこそ**非難の応酬は事務レベル、専門家レベル**にとどめるなかで、未来を見据えた首脳同士の会話が友好的に行われるように環境を整えるべき、ということで一致しました。

激しいやりとりのたびに感じるのは、**中国は日本との紛争が国家の破綻を招きかねないという危機感**、そして特に南西諸島における防衛力強化によって**日米から軍事的に圧倒**され、海洋における主張を通せなくなるのではないかという危機感を、日本国民が想像している以上に抱いているという現実です。

マスコミ報道だけ見ていると、安倍首相の毅然たる姿勢が中国の反発を招いたり、南西諸島における防衛力の増強が中国の軍事的進出につながりかねない、という受け止め方に傾きがちです。しかし、上記のように**専門家同士で厳しい応酬をするなかでしか中国側の本音**を知ることはできない、ということを忘れてはならないでしょう。

お互いに発足したばかりの日本版ＮＳＣ（国家安全保障会議）と中国のＮＳＣ（国家安全委員会）という**国家の司令塔が接点を持ち、事務レベル、専門家レベルの協議**を、それこそ激論を交わすほどの情熱で進めることが、かえって日中両国の間に信頼関係を芽生えさせ、首脳会談実現に向けての効果的な環境作りになるのではないか、という点でも、**私と中国側は共通認識**を抱いています。

日本の国益を見据えた**安倍外交**の舵取りに、今後とも**期待**したいと思います。

以上のように我々の預かり知らないところで歴史は動いています。

我々も興味と関心を持って国内外の情報収集に努め、的確な判断を下さねばなりません。

暫く鬱陶しい天気の毎日ですが、何卒ご自愛専一にお過ごし下さい。

平成二十六年七月一日

宮崎県防衛協会　青年部会　宮崎支部長　小倉和彦